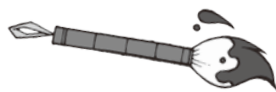


新・下野市風土記

「いつの世でも」



下野市教育委員会 文化財課

7月号に続き、鎌倉時代に関するストーリーをご紹介します。

小中学校の授業で扱う歴史ではほとんど話題にならないことですが、保元・平治の乱の頃から、源氏と平氏は一族や兄弟が敵味方に分かれ、肉親間で鬭争を繰り返しました。頼朝が政権を握ってからも、源氏内で粛清を進めます。一番有名な出来事は、源九郎判官義経を全国指名手配に追い込み、奥州の衣川で自刃に追い込んだ事件です。義経の死は文治5(1189)年閏4月30日のことで、討ち取られた義経の首は酒に漬けられ、黒漆塗りの首桶に収められて43日かけて鎌倉に送られました。鎌倉に到着したのは6月3日の夏の日。この頃、一般的に飲まれていたのは濁り酒ですが、防腐剤代わりに清酒を使用したのかもしれませんが。

治承4(1180)年に頼朝が挙兵し、その後9年間にわたり平氏や奥州藤原氏との戦いが続きます。この内乱で木曾義仲・義経・範頼など、頼朝と血縁関係のある人々も多く亡くなっています。

今回は、この義経が最後を迎える頃までについて触れてみます。

義経は、兄弟である範頼とともに木曾義仲を破り、瀬戸内海の転戦を経て平氏を滅亡させました。その後、義経は頼朝の許可を得ることなく、朝廷から任官を受けてしまいます。さらに、侍所所司として頼朝の命を受け、平氏との戦いからずっと義経を補佐してきた梶原景時にその振る舞いや朝廷との関係を頼朝に報告され、頼朝の怒りを買います。

歴史小説やドラマなどでは、義経だけが任官を受けたように取り上げられていますが、実は多くの東国武士たちが一緒に任官を受け、頼朝に怒られています。壇ノ浦の戦いで平氏を滅亡させてから約1か月後の文治元(1185)年4月15日、頼朝は朝廷官職に任官した者たち24人に、墨俣川(現在の長良川)より東の幕府直轄の支配地に立ち入ることを禁じる下文(書状・命令書)を送ります。その内容は、「勝手に任官を受けたのだから) 帰ってくるな! もしこれに違反したならば本領(領地)を没収し斬罪に処す」というものです。頼朝は相当怒っていました。現代の職場に置き換えれば、彼らは上司や同僚に“ほうれんそう(報告・連絡・相談)”のできない人たちなのですから、頼朝でなかったとしても「まんまと朝廷の策にはまって、何をやってんだ!」と憤ったことでしょう。その日常業務の基本的なことを怠った24人の中に小山朝政と八田知家があります。

頼朝挙兵後の寿永2(1183)年、頼朝の叔父で敵対する志田義広(常陸国北部に勢力を持つ豪族)が鎌倉へ進軍します。小山朝政たちは、それを阻止すべく現在の野木町付近で戦いました(野木宮合戦)。義広を破った小山三兄弟(朝政・(長沼)宗政・(結城)朝光)は小山政光の子供たちで、野木宮合戦時に政光は京都大番役のため不在でした。また、小山氏は平安時代後期の律令体制崩壊以降、在庁官人として下野国府に勤務した下野国を代表する氏族で、現在の小山市・栃木市・下野市の一部を領有し、後に千葉氏・三浦氏と並ぶこととなる御家人の中でもトップクラスの大豪族です。

八田知家は宇都宮周辺を領有していた豪族・宇都宮宗綱(八田宗綱)の四男で、頼朝の乳母寒河尼の兄弟です。知家は頼朝の死後、建久10(1199)年4月に発足する「十三人の合議制」(歴史用語で、鎌倉幕府の集団指導体制・後の評定衆の原型。大河ドラマのタイトルはここから)の構成員の一人です。

つまりこの時、朝政と知家はともに北関東の最大クラスの豪族で、幕府草創期の幹部クラスの人物です。それなのに見境もなく任官を受けたので、他の者と同様に帰還禁止の命令書の中で名前を挙げられ、頼朝からひどくけなされています。「鎮西(九州)に下向するの時、京において拝任せしむること、駱馬の道草喰うがごとし(早く九州に行って仕事して来いって言うのに何で京都で官職貰ってんだよ。駱馬が道草喰ってんのと一緒にだろが)」と頼朝に罵られています。頼朝は口が悪かったのかもしれませんが。

参考文献 細川重男『頼朝の武士団』朝日新書